

昭和五年に発表せる創作・評論に就て

「吊籠と月光と」その他

牧野信一

青空文庫

「僕は哲学と芸術の分岐点に衝突して自由を欠いた頭を持てあました。息苦しく、悩ましく、砂漠に道を失ふたまま、ただぼんやりと空を眺めてゐるより他に始末のない姿を保ちつづけた。」

これは今年のはじめに発表された「吊籠と月光と」の冒頭の言葉で、そして私はこの作と「ラガド大学参観記」といふ作品とで、さうした砂漠の世界から駆け出して、不思議な原始生活の中に翼を拡げて、ある生活を見出すまでのことを書いたのであるが、

「吊籠と月光と」は、そんな前後のことなどは別として、それまでの自分の作品のうちで最も好意が持てるものであるやうな氣がしてゐる、現在――。

そして私は春のはじめに、東京に移ると間もなく「歌へる日ま
で」と称する作品にとりかかった。これも四十五六枚の短篇であ
り、書き終るまで案外の日数を要し、久し振りの慣れぬ東京生活
で困ったことばかりが多かつたが、作そのものに対しては珍らし
く屈託のない明るさで、歌ふが如く、自由に、愉快に処理するこ
とが出来た。「吊籠と月光と」の、あの冒頭の言葉の後に展けた、
広漠たる、明るい山と原野と森のある世界を、馬に乗つて駆け廻
る自分の姿は、その心持は、村を棄てて、都に出ても続いて私に
健やかな夢を与へた。私は、幾つかの随筆も書き小篇も書いた。
そして「R漁場と都の酒場で」「変装綺譚」「ダイアナの馬」な
どといふものを書いた。——要するに、今年の私は、あれまでつ

づいてゐたあんな砂漠を通り越して、まだ跣足のままである！
といふ程に過ぎない。私は、生活が芸術の反影だと思つた。

青空文庫情報

底本：「牧野信一全集第四卷」筑摩書房

2002（平成14）年6月20日初版第1刷発行

底本の親本：「新潮 第二十七卷第十二号（十二月号）」新潮社

1930（昭和5）年12月1日発行

初出：「新潮 第二十七卷第十二号（十二月号）」新潮社

1930（昭和5）年12月1日発行

※底本編集時に付されたと思われる、表題冒頭の「●」は省きました。

※「昭和五年に発表せる創作・評論に就て」と題したアンケート

への、「「吊籠と月光と」その他」との回答です。

入力：宮元淳一

校正：門田裕志

2011年8月1日作成

2016年5月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

昭和五年に発表せる創作・評論に就て

「吊籠と月光と」その他

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 牧野信一

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>